

いつも穏やかな顔ということはもう心も穏やか。心

の中にお花をいっぱい詰めてる、私は。

語り手 村松経子（元早苗会会長・日本文化研究部華道指導員）

聞き手 山本愛莉

守山女子高校時代

―立命館守山高校、中学校ができる前からつながりがあったとか。

はい。この学校の前の学校、守山女子高等学校から。三十七年度卒業になります。ほんであなたたちとはもうね（違つて）、学校も向こう、勝部つて、あつちでしたし。で、ちょうどその時、役をしていた関係で、その守山女子高等学校が立命館に移管（二〇〇六年）するということ、そういう大変な時期があつて、何回も会議を開いて、はい、そういう状態でした。

―守山女子高等学校はどんな学校でしたか。

守女（守山女子高等学校の略称、以下「守女」）の時は、あそこはなかなか、お裁縫もできて、洋裁もできて、生け花もできて、お料理もできてという、昔は花嫁修行のような感じの学校だったんですよ、最初は。でも、私はもう入る前からお花をしたかったので、お花の部活に来ていらつしやる先生がお花に熱心な先生だと言っているのを聞いて。もう他の事何もなくその花の道に進もうと決めていたから入ったんです。

―学校では今という国語とか算数とかつていうのもあつたんですか。

もちろんあります全部の教科ありましたよ。

―その主要教科にプラスでお裁縫があつたんですか。

そうです。お花とか皆さんの今の教科にはない。それでもうみんな就職とか決まってくるんですよ。大丸とか。そういうところにさつと。就職がすごく良かったかな。

―守女と立命館守山を比べた時に、何が一番違いますか。

やつぱりね、立命館の方が勉強が厳しいかなつて。進学が多いじゃない。けど、守女の時は、やつぱりもうすぐ結婚とか。うん、そういう時代やからね。そこで会った人はもう早かつたよ、結婚。お嫁に行つて、京都のね、おつきいところから貰いにきてくれはつた。

―守女の校則はどんな感じでしたか。

やつぱり、厳しかったです。

―今の立命館守山は、今年から校則が変わつて。例えば、ピアスとかネックレスとかが体育の時以外つけてもいいことになったんですよ。それについてはどう思いますか。

すごい。もうね、やつぱり、時代にね、あつて行かなあかんと思う。

私も古いこと言つてはあかん。孫が八人とひ孫が一人いるので、その子達とやつぱり話してると、そういうことになってくるかな。でも、みんながみんなピアスしたり、髪染めたりはしてないでしょ。

―多くはないですかね、茶色に染めてたり。

広い心になつて。難しいけど。

―制服はどんな感じでしたか。

守女の時はね、制服可愛かつたよ。紺色にリボンやつた。

―（自身のリボンを見せながら）こんな感じのリボンですか。

まあ、そんな感じやな。きちんと制服あつたよ。ほんでね、礼儀正しいとか、規律があるとか、そういうことを学べるから、就職が良かったかな。皇室の方に行つてる子もおるしね、友達に。

今

*

―村松さんは卒業後どうされたんですか。

そう、三年間いろいろ学んで、お花の道に進んで卒業後、生け花でお免許取って三年間勉学に励んだ。卒業してすぐお花を教えに行きました。それからここ立命館守山もずっと続いているということです。一応、華教授ですよ。試験があつて、今は最高職位、一番上やな。去年、一昨年にももらいました。

―一番上の段を取るには、どれくらいかかるんですか。

六〇年かかったかな。けど、もっと早くももらえるよ。ちよつとずつ勉強してやな。私はもうね、十年前ぐらいから最高職位あげるって言われてた。そやけど、まだいいです、まだいいです言うて、十年ぐらいゆっくり勉強して。教える側になつても勉強する。もうずっと勉強やな。先生になつたら余計やな。担任になつたら余計。

―卒業後に教えていた時と、今、立命館で教えている時つて、なんか差つてありますか。

いや、ありません。ちよつと、お行儀がいい。こつちの方が、本当は向こうの方が行儀いいって言いたいんだけど、女子ばかりでしたし、自由性もあつたし、なんか今の方が、やつぱり礼儀正しいっていうか。今の子は、言われた通りしてくれる。やつぱり初めは、私と二、三歳違いでしょ。親しみもあつたかもわかりませんけど。こつちの方が、やつぱり硬いかな。硬いつていうか、素直つていうか。私の言う通り、みんなしてくれるかな。

―実際に。日本文化研究部で、教えられてると思うんですけど、どういった活動をしてるんですか。例えば賞を取るためにコンテストに応募し

たりつていうのを行つているんですか。

初めのうちは月に一回か二回程度で。自由花とか、色々、その季節に応じた、季節にあつた作品で生けていただいていたけど、今、三、四年前からかな、「花の甲子園」つていうのができまして、その近畿大会に出ることになって三年目です。頑張つて。三名が出るんですけど、そういう勉強も今は一生懸命。七月二十七日です。近畿大会が。

―再来週ですね（七月四日時点）

京都の御池の方であるんです。

―「花の甲子園」では、どんなことをしているんですか。

十六種類のお花を、当日まで何かわからん花が配られて、で、その三名の人が相談をして、お話して、これを使う、これを使う、これを使うよつて相談をして、三十分で仕上げます。で、自分の生けた思いも、三分スピーチもいりますし、毎回勉強してても、材料が変わるんだから。同じのが出てこない。

―すごい大変ですね。

そうですね。ほんで、線とか、面のものとか、お花の大きい丸いものとか、そういう種類のものはわかりますけど。同じ材料が果たして出るのかどうかはわからない。できるだけ、いろんなものを使つて出るようにね、してまうけどね。

―例えば、三つぐらいその作品があつたとして、甲子園なので一番を決めることになるじゃないですか。そのときつてどういうものが評価されやすいんですか。

その時の3人のチームワーク、それから礼儀正しさ。ほんで、ゴミね。ゴミの整理もきちつと、なにもないように三十分です。でもチーム三人で相談はしてもいいの。

—そうなんですね。テーマって決まってるんですか。

大きなテーマは決まっています。それに対して、自分の心を表現して、言えればいいわけで、毎年変わるんですけど。

—その三分の練習と三分間のスピーチの練習も学校で練習されているんですか。

学校で、これからです。あと三回稽古する中で入れていきます。

—普段は立守以外でもお花を教えられているんですか。

たくさん行っています。家での稽古もありますし、団体の稽古もありますし。でも守女に入ったのは、お花の道に進みたいということが入って、そのままこうして、立命館の一昨年まで、名誉会長をさせていたでいた。校長先生と二人並んで、運動会とか、卒業式とか、毎回寄せてもつてた。今の校長先生も、前の校長先生も知っていますよ。式では、校長先生の隣に、私の名前があつてん。お花の関係で、繋がりがあつたから、そのまま会長をしてん。ほんでね、名誉会長はね、退いた。この間の七十周年の時に、私から、もう抜いてくださいと言って、抜いてもらった。花束もらつて、ご挨拶してもらつて、大勢の中で華やかに退かせてもらった。いろんな人と仲良くなれたな。

—もしかして私の入学式も来られていたんですか。

もちろん行つてました。ほんで、もうずっと繋がっているっていうのがね。十八歳で高校卒業。卒業して、学校は変わっているけど、立命館の卒業になりますね。

—六十二年も関わりがあるってことですか。すごくないですか。

すごいよね。生け花で、その当時はね、野洲高校も行っていたし、農業高校も行ってたし、高校三校ぐらい、若い時は行っていました。

—今まで六十二年間教えられていて、印象に残った作品などはあります

か。

そうやね、ここの学校に来た時に、面のお花を、こういう使い方もあるよつて。後ろに使つたらね、すごくカッコよかった。この使い方だつたら面白そうつて。・・・そういう使い方ができる人がいるつて気づいた瞬間かな。

*

恩師の教え

—個人的な話になるのですが、私は将来教師になりたいと思つていて、「教える」ということで気をつけていることがありますか。

押し付けないことかも、お勉強は別やよ。でも、何事にでも話は、やっぱり生徒の話はよく聞く。聞く方やと思う。「こんな考えやつたからこういうたんか」というのが理解できるように。

—なるほど。聞くこと大切ですね。

そう。お花の先生でもね、もうパツと止める先生もいるんや。

—そういう先生は怖いです。

そうでしょ。でもやっぱり生徒には、先生に何でも話せる方が良いと思うね。先生に聞いてもらおつて。その時に、先生の意見で決める人もあれば、自分の意見はこうなんです。先生はどう思われますか。つていう場合もある。その人の意見も尊重しつつ、自分やっぱり大事に。自分の線やつたり、軸があるんやんか。それを曲げることしなくていいと思う。狭い気持ちじゃなく、大きな、大きな気持ちで接するとそんなに難しくないかな。

—やっぱり人それぞれですもんね。

全部違う。同じ材料で二〇人なさつても、二〇人とも違う。でも全部いいところがあるから、絶対に抜いたりしない。私は、その花をより一

層綺麗に見せる方法にしましうねって言って、一本か二本変える。位置を変えるだけでもう、変わる。それで納得やんねって。そう、一人一人性質違うもん。「この人には言ってもいいけど、この子にはこの言葉は言ったらあかん」とか。

―全部抜かれてしまうと悲しい気持ちになってしまいますもんね。そういうことって、どうやって見抜けるんですか。

やっぱ『年教』です。最初のうちはわからんな。そう。いいところをね、褒めなあかんよ。一〇種類以上使っているから、その中にはいいものがあるものなんだ。この中では、このお花がものすごく生きてるねって、これを活かそうねって。その中にはこれはこの位置の方がいいねっていうのを見つかる。私はずつとしてきた。全部個人的に性質あるから、それを見抜く。見抜くには、やっぱりね、笑顔。愛莉ちゃんね、笑顔がいい。

―ちよつと恥ずかしいです。

本当よ。優しい言葉、優しいお顔。そしたら、そんなきつい暴言的な言葉は出ない。いつも穏やかな顔ということはもう心も穏やか。心の中にお花をいっぱい詰めてる、私は。そういう気持ち。

―そういうふうに教えようと思ったきっかけは、高校生のときの恩師の先生の教えなんですか。

そう。私は花を抜かれなかった。これを活かすためには、この向きの方がいいとかそういうことを言われてきた。それが、今の私にも生き続けています。

―その恩師がいたから、守女を選んだんですね。やっぱり、今、母校で働くっていいですか。

そう。それはもう嬉しいよ。

―すごいお花が好きなのが伝わってきます。

でしょ。ほんで、「え、守女行くの。」って言われたこともあったけどね。私はもう、お花っていうのを父がそういう道に導いてくれたんかわからないけれども。それはもう三歳ぐらいから、そういう道に行くような、教育受けたように思います。もうよちよち歩きの頃から野山連れて回って、これは何の花だよ、これは何の花だよ、これはやまゆりだよとか、小さい頃から教えてもらったり。

―お父さんもお花好きで、子供のことが好きなように感じます。

そうかもね。家がお寺でもあるので、そういう関係で、なんかあなた方だから考えたら自由がないように思うかもわからんけど、私は別にお寺をつがんらんと、頭剃って尼さんになる。そこまで思ってたぐらいで、生け花をしたらいかなっていうのはもう小さい頃から思ってたので。それで、もう何にも迷うことなく、こんなお裁縫やら嫌いやったけど。でも、今は一通りできるし。お洋服も縫えるし。

―私、お裁縫とかできないんで羨ましいです。

ほんでね、その恩師、去年、亡くなったんやんか。けど、亡くなる前の日、病院へ行ったら、お花生けてはんやで。すごかった。

―すごい、その方もお花が大好きだったんですね。
すごいいい人やった。

*

友情の庭と早苗会

―立命館守山になって、変わらなかったことってありますか。

今のことはあんまりわからないけど、庭は今も昔も一緒やね。校門のところに庭あるん知ってる？

―桜があるのは知ってます。

そう。その隣に庭があるねん。それは、守女の時からずっと同じ。みんなこっち（立命館守山）に移すのは快くオッケーしてくれた。誰の反対もなかったよ。あと、同窓会があるでしょ。早苗会。九月かな。それにもいきますよ。案内もらったんで。おばあちゃんがそんな行ってもいいかなと思うけど、私も役してたし、辞めさせてもうて、まだ一年やから、新しく私らの同級生やらも誘ったんですけど。みんなびっくりしはると思うわ。変わっているから、若い人ばかり。そんなね、七十年代、六十代の人は少ないと思う。もう学生がほとんど、もう若い人ばかりの会やと思う。

―同窓会はどんなことをするんですか。

一年の総括みたいなものかな。みんな集まるの楽しい。そのね、私ら女性でしたので、早苗会、田んぼの。その早苗会をそのまま使って欲しいっていう希望を言ったんよ。けど、反対があった。女性の学校であって、その田んぼの名前って、と捉えはったんちゃうかな。ほんで、早苗会の名前はできたら残して欲しいと言った。移管の時は、もう何十回も会議があったの。それに出て、私たちで、場所も変わるし、いろんなものも変わっていくやんか。それで、お庭だけは持つていつてほしいと希望を言ったら、すんなり了承してくれた。ほんで、もう一つの希望が、同窓会の名前を早苗会にしていたら、嬉しいと言うことをね、強く言った。そしたらね、最終的に聞き入れてくださって、今、早苗会のまま。

―その早苗会には、どういった思いがあるんですか。

守山女子高等学校があつて、今はないけれども、その前は、守山裁縫所学校か。一番最初は、もうお裁縫ばつかで、南井呉服店つてそこにあるんですよ、守山に。そこが始めはった塾みたいな感じで、お裁縫ばつ

かりやった。これではあかんっていうので、学校に移していく。で、三回ぐらい、変わってる、名前が。だから早苗会はめっちゃ古いことやな。

―一回中学生の時に教えてもらった記憶があります。

そうでしょ。けどそんな昔のことやし、深くは言わはらへんと思う。伝統があるというわけですわね。で、私たちはもう今書くんだったら、立命館と。あ、お花、見にいこか。

（友情の庭へ移動）

―創立二十周年つて書かれていますね。

そう、守女の時創立20周年記念のものやな。

―お話聞かせていただいてありがとうございます。

こちらこそ、ありがとう。また同窓会でね。

（次ページへ）

【感想】立命館守山の前の高校である守山女子高等学校の話が印象的だった。私が、将来関わりたいと思っている教育関係の話も聞くことができ、とても有意義な時間を過ごせた。優しい顔、優しい言葉でいることが大切だと言う言葉が心に残っている。移管するときに大切にされていた「友情の庭」。私は、この庭に込められている思いを胸に刻みながらこれからの学校生活を過ごしていきたいと思った。

右…村松経子さん 左…山本愛莉

